

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同利用・共同研究課題 「現代ムスリム知識人の変容と交流」 令和3年度第1回研究会

日時 令和3年8月7日土曜日

午後1時～午後3時

場所 Zoomによるオンライン開催

報告

高尾賢一郎（AA研ジュニアフェロー、中東調査会）

「ムスリム／イスラーム知識人」を問う」

渡邊祥子（AA研共同研究員、東京大学東洋文化研究所）

「近代国家形成とイスラーム知識人：アルジェリア・ウラマー協会の場合」

※公開（参加者10名）

本年度は、共同での成果刊行を見据えて各自が具体的な事例について報告することとする。これにあたり、本研究会では成果刊行の趣旨及び問題設定の確認と先行研究の部分的な整理、またアルジェリアについての報告がなされた。

趣旨及び問題設定の確認（高尾報告）では、ムスリム知識人というテーマがイスラーム及び近代の「不確実性」と強く関連すること、ムスリム知識人が歴史的に身分ではなく職分にとどまってきたこと、個人単位よりも集合的に捉えられてきたこと等を指摘した。この上で、従来の関連研究の多くは予め「知識人とは誰か」を特定し、そのサークル（イスラーム主義、中道派、ジハード主義等の思想系譜、アズハル、ワッハーブ主義、デーオバンド、トルコ宗務庁といったローカル・グローバルなネットワーク等）の人間関係を取り上げることに取り組んできたことを説明した。

アルジェリアについての報告（渡邊）では、植民地期にウラマーが取り組んだイスラーム改革を中心に、宗教と国家の制度的分化について西洋（世俗化）との比較も交えつつ検討された。具体的には、植民地統治の一環で行われた「聖職者」の公務員化、巡礼・宗教教育の管理、政教分離法の制定によるイスラームの公認化といった状況下、非政治的な文化活動団体としてウラマー協会が結成（1931）されたことを確認した。そして、教育、喜捨、寄進等

の活動を通してネットワークを拡大した後、内部に複数の宗教協議組織を設けてフランス及びアルジェリア政府に対して自律的な（政教分離制度を逆手に取った）イスラーム実践を要求し続けたことを説明した。

質疑応答では、メディアやジェンダーといった現代のムスリム知識人像を描き出す上で重要となると思われる要素、またアルジェリアのウラマー協会以後の知識人の動向等について議論がなされた。

（了）